

らんの イナン #7

かんこれ、始めました。編

著：藍澤たすく

イラスト：かもめ遊羽

らのけんってどんなお話?

三郷^{みさと}学園高校「ライトノベル研究部」

——通称らのけん。

それは世にあふれるラノベを読みまくり、また自らも書きまくり、総合的にラノベへの造詣を深めることを目的とした志^{こころ}しの高い部活動……のはず、なんだけれど……。アレ? 実際フタを開けてみたらなんか思ったよりゆるくない?

だがしかし! それこそが「らのけん」の魅力! という感じで展開するまったく系日常部活コメディなのです!



緑川萌

ラノベと動物をこよなく愛する素直でまっすぐな女の子。その直情径行さゆえに突っ走ってしまうことがあるのはご愛嬌。



白井華子

らのけん顧問教師……のはずが、見た目が一番幼いのため、部員からも「華ちゃん」と呼ばれ親しまれる癒し系な存在。覆面ラノベ作家一条れんとしても活躍中!



赤城操

クールビューティーな眼鏡っ子。微に入り細を穿つ綿密な設定作りには、らのけん内でも定評がある。



黒田美玖

愛情表現がセクハラチックなボーイッシュ女子。いつもそのターゲットにされる華子の苦勞は、推して知るべし。何気にミステリラノベ好き。



紺野司

ラノベ作家としての華子、つまり一条れんを担当する編集者。AG文庫編集部に所属。天然な華子の創作活動を、陰に日向に支えてくれる心強い存在。



青山一斗

らのけんの黒一点。なんにでもすぐに首を突っ込みたがる好奇心旺盛な性格の持ち主。

それはあるうらかな日曜の午後のことだった。

——モンスター♪ モンスター♪ きみはモンスターペアレンツ♪ モンスター……

自宅でゆったりとくつろいでいた華子の耳に、軽快なスマホの着メロが響いた。

「あ、ひえちゃんからだ！ もしもーし！」

着信画面にひえちゃん——氷川英子、華子の幼なじみにして、現在声優修行中の身——の名前を見つけた華子は、ウキウキしながら電話に出た。（※ひえちゃんについて詳しく知りたい方はGA文庫マガジン2014年9月合併号の「らのけん！ 2 夢の最終選考編」をご覧ください）

『あ、華子？ まんみー、送ってくれてありがとう！ 読んだよ！ めっちゃ面白かった！』

「うわあーありがとう。ひえちゃんにそう言ってもらおうと嬉しさ倍増だよー」

デビュー作を英子に褒められた華子は、頬を紅く染めてふにやふにやと身をよじらせ始めた。なにこの可愛い生き物、今度からドラ●エで「ふしぎなおどり」をするのは華子型のモンスターにしたい。

『特にスカンクガールが、食べたガールと食いしんボーイを倒すシーンは最高だったね。もう電車の中だったけどさ、声出して笑っちゃったよー』

「あ！あのシーン、ほかの読者さんにも好評なんだよ〜ありがとう〜」
 『なんかさー、華子もこれで作家先生になったんだね〜ってしみじみ思っちゃったよ』
 「そんなことないよ〜、今も2巻の原稿書くのに超必死だし〜。全然作家って感じじゃないよ〜。期末テスト前の中学生みたいだよ〜」

電話の向こうでふふふふ、華子らしいなあ、という英子の楽しそうな囁きが聴こえた。そしてしばらく間をおいて。

『あーのさ、デビューでは先を超されちゃったけどさ、あたしもやっとなりてから初仕事決まったんだYO★ この前スタジオで声の収録してきたはっかかりなんだ★』

「え!? 本当!? やったじゃな〜い! おめでと〜う、ひえちゃん!」

華子は喜びのあまりスマホを取り落としそうになり、慌てて持ち直す。

「で、なに? なに? なんのアニメ? 何の役?」

『あははは、期待を裏切つて悪いけど、アニメじゃないんだ〜。あーのさ華子、スマホの【かんこれ】つて知ってる?』

「かん……これ……?」

『うん、関西これくしょん。通称【かんこれ】つてやつ』

「あー、知ってる! それこの前、部室で青山君がやってた! なんか今すごい流行ってるやつでしょ!」

『うん、そう、それぞれ。あたしそれで【デンガナー&マンガナー】つてキャラ演ってるから、良かったらダウンロードして聴いてみてね』

「うん! 絶対やる! 今すぐやる!」

『あははは、暇な時でいいよ〜』

「だつてひえちゃんの初仕事でしょ? あたし今すぐ聞きたいんだも〜ん」

『あははは、ありがと〜う愛してるよ、華子〜』

このなごやかな会話が、のちにあのような悲劇を生むとは、この時は誰も想像だにしていなかったのだった……。



「〜みださん、おはようございます〜……」

「「は、華ちゃん!」」

「教室に入ってきた華子を見て三郷学園高校1年3組の生徒たちは戦慄した。」

何故ならいつも元氣潑刺・天然炸裂の華子が、今は見るも無惨な憔悴しきった姿になっていたからだ。

頬はこけ、目の周りはいくまで真っ黒に落ち窪み、足許もおぼつかない様子で教壇に向かっ

ている。その姿はさながら幽鬼ゆうきのようであった。

「それではホームルームを始め……きゆう〜」

「「は、華ちゃん!」」

その場にくずおれるように倒れた華子は、応急修理要員達（＝生徒達）によって迅速じゆんすくに保健室に運ばれたのであった……。



そして放課後のらのけん部室――。

「え〜!? 徹夜てつやでゲームやってた〜!?」

「はい……」

若干呆れた様子の萌もえの前で華子はしょんぼり頷いた。

「なんでそんな無茶したのよ〜華ちゃん〜ん?」

「華ちゃんってばそこまでゲームだったっけ?」

萌の後ろで文庫本を読んでいた「斗いっとうが、顔を上げて華子に訊きいてくる。

「いいえ、あたし普段は全然ゲームとかしないんですけど〜、ひえちゃんが演あってるキャラの声がどうしても聴きたくって〜、でも全然出てこなくて〜……」

華子がめそめそと涙目になる。

「それで徹夜しちゃったわけね〜。へ〜、でもすごいね。かんこれって氷川先生が声演こせんってるキャラがいるんだ〜」

「どれ、ちょっとスマホ貸してみ。関これなら、俺、相当やり込んでるから、どんなレアキャラでもすぐ出してや……うおおおお!?」

華子からスマホを受け取った一斗が驚愕きょうがくに目を見開いた。

「どったの、青やん?」

「サイデッカー・レベル99がいるじゃん! これ、超レアキャラじゃん! あ! ホウデツカーもレベル99でパーティー入ってる! 俺この2体ふたごが揃そろってるとこ初めて見た!!」

一斗が鼻息も荒くスマホを操作し続ける。

「マジかよ!? 『ホナナ』も『チャウチャウちゃん』も『モウカリマッカー』もいるじゃん! 華ちゃんどんだけやり込んでんだよ!」

「でもひえちゃんが声を演あってるキャラだけが全然出てこないんですよう〜」
華子は部室のテーブルに顔を突つ伏ふしたまま、じたばたと手足を動かした。

まるで甲羅かろごと空中に持ち上げられた亀かめのようだ。

「はあ〜、こんだけやり込んで出てこないキャラって一体何よ?」

「デンガナーちゃんとマンガナーちゃんですよう〜」

「は？」

一斗がぼかんとした表情になった。

「……それって超ザコキャラじゃん？ 序盤じよばんでばはん出てくる奴じゃん？」

「でもでもでも全然出てこないんですぅー!!」

華子がまた手足をじたばたと動かす。まるで駄々だだっ子こそのものである。

「そんな馬鹿ばかなこと……あっ……」

一斗のスマホを操作する手が止まった。

「どったの、青やん？」

「この関これ、超絶課金コースになってるじゃん……?」

「ふえ?」

「しかももう50万ぐらい使っちゃってるじゃん……?」

「ふえええええ!!」

一斗のあり得ない報告に、華子の思考が完全停止する。

「あの……超絶課金コースって……」

「最初にアプリ立ち上げた時、訊かれたっしょ？ 無課金コースにするか通常課金コースにするか、超絶課金コースにするかって」

「あ……なんか出てきた気はするんですけど……早くゲームやりたかったから……よく見ずに

押しちゃったかも……です……」

「ほら」

一斗が示したスマホのステータス画面には確かに「超絶課金コース」の表示があった。

その下には「今月の使用金額合計は53万4千7百円でっせ、毎度おおきに!」という軽々い文章が確認できる。

「どどどどどっすればいいんでしょー?」

華子が涙目で一斗にすがってくる。

「どうすればって……超絶課金コースだとドンガナーもマンガナーも出てこないみたいだし、アプリを削除さくじょしてもつかい最初からやり直すしか……」

「ええええええー!!」

あまりのショックに華子はその場にへなへなと座り込んでしまう。

「……わかりました……しょうがないです、じゃあ、アプリを削除して……」

「ちよーと待ったあー!」

よろよろとスマホを操作しようとした華子から、一斗は光速でひき止める。

「なにするんですかー、青山くん?」

「だってもったいないだろ!? ホウデッカーもサイドッカーもいるんだぜ!? アプリ削除したらそいつらも消えちゃうじゃん!!」

「でもあたしはひえちゃんの声が聴きたいんですうー!」
 「そんなのだったら俺のスマホでいくらでも聴かせてやるから、アプリ削除はやめよ? な? な?」

「それじゃ意味がないんですー! あたしがちゃんとプレイして、あたしがちゃんとデンガナーちゃんとマンガナーちゃんを出して、それからきちんと声を聴きたいんですうー!」
 ポケットからスマホを取り出して関これを起動しようとする一斗を、華子は全力でブロックする。

「華ちゃんもこう言ってるし、そうさせてあげなよ。ね、青やん?」

「はあー……華ちゃん一回決めると頑固がくとだからなあ……もつたいなあ、ホウデッカー……」
 萌にそう促され、一斗はため息混じりに自分のスマホをポケットにしまった。

「じゃ、削除します……」

華子がアプリ削除画面に関これ呼び出した。

そして……。

「どつたの、華ちゃん?」

そのままの姿勢で固まってしまった華子を萌が横から覗き込む。

「あ……これ、アプリ削除したらお金が戻ってくるとか……ないですよね?」

一斗、頷く。

「アプリ削除したら、もう全部消滅しちゃうんですよね……?」

一斗、頷く。

「53万4千7百円……あたしのボーナス全部……今度の休みは台湾たいわんに遊びに行こうって思ってたのに……思ってたのに……」

涙目でぶるぶる震ふるえ出す華子。やはり最後の最後で惜おしくなったようである。

「えええーい! すべてはひえちゃんのためなんだからー!!」

華子は意を決して、ぎゅっと目をつぶり、アプリの削除ボタンを押したのだった……。



その夜――。

「ひえちゃん、デンガナーちゃんとマンガナーちゃんの声聴いたよ! 超可愛かったよ!」

「あ、華子もうやってくれたんだ! ありがとぅ〜」

【失われた53万4千7百円】の事を無理矢理忘れ、華子は努とめて明るく振る舞まっていた。

「デンガナーもマンガナーもザコキャラだからすぐ出てきたでしょう? 台詞せりふも一言だしね。やっぱさ、まだ新米だからレアキャラとか全然演やらせてもらえないんだよね、当たり前だけど」

「……………」
 「でもね、今にもっと力つけて、人気声優になって、1万でも2万でも課金してゲットしたいってぐらいの魅力的なキャラ演れるようになるからね！ 見ててね、華子！」

「……………」

「華子？」
 電話口で急に黙り込んでしまった華子に、英子は訝しげに呼びかける。

「……きだよ……」

「え、なにに？ 聞こえないよ？」

「ひえちゃんの声はもう十分魅力的だよ！ あたし1万だって2万だって53万4千7百円だって課金して全然いいくらい、ひえちゃんの声は魅力的だと思っようよ……あああああぁ~~~~~~~~ごじゅうさんまんよんせんななひやくえくん~~~~あたしの~~~~ごじゅうさんまんよんせんななひやくえくん~~~~!!」

「え？ なに？ なんで泣くの華子？ 53万ってなに？ なんのこと？」
 電話の向こうで突然号泣を始めた華子に、英子は戸惑うばかりだった……。

つづく

●「らのけん！」シリーズ掲載号一覧

★2014年

- G A 文庫マガジン7月24日配信号…らのけん！
 2 夢の最終選考編
 G A 文庫マガジン9月合併配信号…らのけん！
 3 はじめてのおつか……うちあわせ編
 G A 文庫マガジン10月27日配信号…らのけん！
 4 思い切って告白しちゃうぞ編
 G A 文庫マガジン11月27日配信号…らのけん！
 5 ペット攻めたり編
 G A 文庫マガジン12月25日配信号…らのけん！

★2015年

- G A 文庫マガジン1月22日配信号…らのけん！ 6 はじめての発売日編